

38 教育！その「混迷」から、いかに「脱出」すればよいのか？！

堂本 彰夫

(1) とにかく、「教育」、とりわけ「学校教育」の混迷は明らかである？！

しばらく（一か月余？）、この「新教育協働への道」での論考を止めていたが、新年度（2025年度）を迎えて、やはり何かは形にしておかなければとも思い、再び書き始めることにした。何を書いても、各地の現場（学校教育、社会教育を問わず！）で頑張っている（奮闘している？）人達には、ほとんど私の声は届かないとは思いつつも、「教育協働研究所～岳陽舎～」と名乗り、数は少なくとも、想いを共有できる人達に、自らの意見やアイディアを提示（アピール？）している身として、何とか続けていきたい、否、そうしなければいけない？と、再び思い始めたのでもある！だが、それはともかく、今まさに、「教育」は「混迷」の淵に立たされている？！ここでは、その具体的な表象すべてを示すことは出来ないが、それを象徴しているのが、子ども達の「いじめや不登校」（自死を含む）、そして教職員の「疲労困憊と離職」の増大である！言い換えれば、それは、教育、とりわけ「学校教育」の本質（存在意義）を根底から覆しているものでもある！

尤も、そうした問題は、あらゆる制度／組織下において、大なり小なり起きざるを得ない状況でもあるので何とも言えないものもあるが（人間関係の不具合、不適合・不適応は、生きとし生けるものの宿命？もちろん、これを、単純に正当化するつもりは毛頭ないが！）、現在は、その規模や原因の複合性において、どうしようもないところにまで至っているということである！さらに、もう一つ重大なのは、そこにおける主役自身（児童生徒及び教職員！だが、決して主人ではない！）が、そこにいる意味ややり甲斐（演じあるいは働き甲斐？）を感じなくなっている？だから、頑張り（ちょっと不適切な言い方だが？）たくなくなっている？しかも、周囲が、それでよいというような風潮も高まっている？では、そうした場所・機関は、最早必要ではないのか？そういうことにもなる？そこが、問題だということである！

とは言え、そうした問答を、ただ当てもなく繰り返したところで、それ自体では、事態は一向に進捗しない？要は、教育、そして学校は（もちろん社会教育も！）、何故必要なのか！そして、そこでは、どういう内実が必要なのか！そのことを、もう一度原点に立ち戻って、考えてみる必要があるということである！そんなことは、分かり切っている！しかも、そのことは、憲法（26条）や教育基本法等に書いてある！そう言う人も、多分大勢いることであろう！でも、残念ながら？その実体が、うまく顕現されていないのである（そうなら、こういう事態にはなっていない？）？！では、どうすればよいのか？現行の法律や制度のやり繰りだけで済むのであれば、それをやればよい？しかし、そうしたことは、これまでに、ある意味絶えず？行われてきた！時代状況の変化に、それらがついて行けていないとも言えるが、では改めて、どこ（何）を、どうすればそう出来るのか？実は、そこが見えていない？だから、混迷は、その度を深めていくばかり？

しかるに、こんなことばかりを言って（しかも言うだけ？）、頑張っている人達には大変申し訳ないが（否、心苦しいが！）、少しでも役に立つ考え方（方途）がないものか？そんなことを思っただけで、ここでの論考ではあるので、それを以下、敢えて試みてみたい！これを受け止めてもらえるかは、多少の不安もあるが、やっていること、頑張っていることの意味や方向性に対して、何らかのエール？になれば幸いである！それは、別途書いている「岳陽と共に」でも話題にしたもの（松岡正剛『日本文化の核心』（講談社現代新書、2020年）から抜粋・編集したもの→「日本人はどのように『学び』をしてきたか」）であるが、「学び（学習）」と「支援（教育）」のあり方を、深く（もう一度）考えさせるもの（きっかけ？）が、そこにはあるということである！

(2) 「試験制度（受験地獄？）」を、いかに乗り越えていけばよいのか？！「模倣と協同（働）」の重要性！

だが、その前に、これだけは触れておかなければならないことがある！それは、「試験制度（受験地獄？）」の存在である！いわゆる「学歴社会」の問題でもあるが、実は、この眼前の混迷は、もともとは、それに端を発することは（→幸せ獲得競争？）、衆目の一致するところであろう？！特に、その最終段階にある「大学入試」が、その元凶ではないかということである（ただし、それは、本当は「言いがかり」だとも言えるが？）！つまり、そのことを有利に進めるために、可能な限りの早期準備を行うことを余儀なくさせ（受験至上主義）、親や子ども達に、かなりの長期間、それに邁進させ（時間や経済的、さらには心理的負担を増大させ）、そこから離脱することを許さなかった？！それが、すべての親や子どもに、幸せで健全なゴールを与えたならば、それはそれでよかったのであるが（実際は、そういうことは不可能！詳細は省く！）、多面的で、複合的な「社会問題」（「格差社会」！「少子化」もそれに含まれる！）を産出してしまったわけである？！

いずれにしても、そうした「試験制度（受験地獄？）」（「学歴社会」）の隘路や悲劇？を、いかに克服していけばよいのかということが、改めての大きな課題となるということであるが、選抜や競争自体をなくす

ことは出来ない(否、なくしてはいけない！だが、不正は絶対に許されない！でも、何故起きるかは容易く分かる?)！それは、我々人類(ホモサピエンス)が、現在のような高度な社会システム(様々な組織・事業体)を維持・発展させるためには、どうしても不可欠なツール(要員充足・確保)となるからである！しかし、そうは言っても、入試自体(入社試験も同じだが?)は、やり方次第では、その隘路や悲劇？を、可能な限り緩和、減少させることは出来る(たとえ年一回切りであっても？が、ゼロにすることは出来ない!)?!なお、員数をしぼるだけであつたら、それ自体は、ほとんど意味はない(面接や体験入学→仮入学で十分？ただし、それは、今のところ、せつかくある「大学入学共通テスト」の成果を活用することを前提とするが!)?!

そこで、本題であるが、問題は、それまでの学習の成果(単なる暗記や○×式の解答では得られない!)を、そこで必要とされる知識や技能、そして意欲を示すものとして、いかに正当に受け止めるかということである！その一つの試みが、かの松岡正剛氏が指摘した(残念がった)、大学入試改革での記述問題の導入(「高大接続プロジェクト」の一環→教育的な一貫性と広い枠組をつくりだそうという狙い)であつたのであるが、結局は、それは見送られた(採点の難しさや現場の教師、受験生達も、記述式に難色を示したことが大きな原因とされる?)！これについて、彼は、「日本人がかつてどんなふうに『学び』(学習)をしてきたのか、その際にどんなテキストや道具を採用していたのか、端的に言えば『読み書きそろばん』をどうしてきたのか、そのことを通して日本人に蓄積されてきたであろう学び方について考えてみよう」としたのである！それが、まさに「模倣と協同」ということであるが、その重要性は、これからの教育(学校教育)を考えるに当たって、大いに参考になるということである！ちなみに、それは、もちろん「大学入試論」自体ではない？！

(3)「教育」の合力(総力)を、如何にして創り上げていくかが重要なのである！

しかるに、彼は、「世に『読み書きそろばん』といいますが、…分解していえば「読み書き・そろばん」です。だからといってリテラシー(読み書き能力)とニューメラシー(計算能力)の習得をさせているだけではなく、またその高度化や高次化が求められているというのではなく、そういう能力を支えている人間の認知力の基本を暗示している言葉なのだろうと思います。」として、レフ・ヴィゴツキー(発達心理学者:「学ぶ」ということの基本を解明するために数々の仮説を提案し、子供には「内的な認知道具が潜在している」ということを暗示した)の名を挙げ、「幼児や子供にひそむ内的認知道具を育むような教育こそが最も大事な『学び』の触発になるだろうということ、とくに『模倣と協同』が基本を触発している…その『模倣と協同』は民族的な心情や言語感覚に密接に関係している…日本の主だった大学試験に記述式が敬遠されたのはとても残念なことでしたが、このことは今日の日本人の認知力が文章적ではなくなっていることを暴露したもの…」。

そして、「ここでは、なぜこんなふうになったのか…結論から先に言うと、…日本人の『読み書きそろばん』のためには、ヴィゴツキーの『模倣と協同』にあたるものがあらためて必要…。それには世阿弥の学習方法論を大きな前提にすべき…それが日本人の『学び』の根幹をつくる…ぜひともそう願ってほしい…。世阿弥は『まねび』を稽古(古きを考える。古きは『もともと』の意)することをもって『まこと』に近づいていくことを『まなび』とした。日本では、武芸に限らず多くの分野で『道』という文字…『職人芸』や『匠の技』が強調される背景には、日々の活動の中で『守破離モデル』が無意識に回り、自己実現への思いが貫かれている」とするのである。さしずめ、現在の教育(学習)には、必要な成長・発達(一人前になること！微妙な表現ではあるが?)を遂げる中身とプロセスが希薄、否、剥落させられているということであろう?!

翻って、基本的には、私も、この論に、ほとんど賛成なのであるが、このことは、やはり、今の学校教育だけでは限界があり(無理?)、そのことを、多様な社会教育(家庭教育を含む)の場面と協同(協働)して、そうした機会とプロセスを「総合的(or 融合的)に創出していくことが有効であり、そのことがまた、地域づくりや仲間づくり、そして後継者づくりにつながるということである！それがなければ、まさに、子ども達の不幸？や教職員の不遇は、到底払拭できないということでもある！「生きる力」「アクティブラーニング」、あるいは「SDGs」「人生100年時代」「絆づくり」「ウェルビーイング」等々、様々なキャッチコピーを提示しても、その実体を創り上げていくのは、他ならぬ、それぞれの地で生きている、多くの普通の人間(生活人)である！そして、これが今、教育全体に求められている大きな課題であるということである！

ただし、現在の想定としては、分業、役割分担と言う名の、「学校教育」と「社会教育」の壁がある！実は、そのことを自覚(自省?)させてくれたのは、かの「生涯教育／学習(タテとヨコの統合)論」であるが、残念ながら、そういうところまでは、これまでの論や施策は及ばなかった？だが、他ならぬ、双方の教育が、多少タイムラグはあるが、それぞれ苦しんでいるのである！そして、その限界を迎えているのである?!したがって、今、改めて求められるのは、その想定(現行)の再考であり、既存のシステムの再編なのである(そういう意味では、かの「総合教育政策(局)」は、正鵠を射ている！ただ、そこに、必要な内実が伴っているかどうかは、今のところ？ではあるが!)。それを創り出していくのが、まさに「教育協働」なのでもある！(つづく)